

細胞が発生する時期を同定することで、歯の再生研究に有用な材料になりうると考えられた。
結論：iPS細胞由来奇形腫は様々な組織の発生過程を調べる上で有用なツールであると考えられた。

演題4. Dalhousie University での高次臨床研修を通して

○守口万里子

岩手医科大学歯学部6学年

2010年3月2日より、Canada, Nova Scotia, HalifaxにあるDalhousie UniversityのOral and Maxillofacial Surgeryにて、2週間の高次臨床実習に参加させて頂きました。Dalhousie Universityは創立1818年、学生数1万5千人、卒業生からは2人の総理大臣や赤毛のアンの作者、宇宙飛行士等を輩出している由緒ある大学です。歯学部は1908年に創立され、学生総数180人程に対して、教員数はAssistant Professorまでで90人、インストラクターを含めると120人以上となるそうです。学校の特長として学生に対する教員数が多く、2年半の臨床実習期間に学生一人当たり平均で55人程の患者さんを受け持つ事があげられます。また学校内のオンライン化がとても進んでいました。

実習は、現地学生と同じ口腔外科のローテーションに参加させて頂きました。実習初日、自身の知識の無さを心配し教科書や辞書を手術室のラウンジまで持参したのですが、先生から「心配しなくて大丈夫、学生なんだから今は細かい術式や名詞ばかり気にするのではなく、もっと目の前で行われている事を感じとって欲しい。」と仰って頂き、本を置いて目の前で行われてる事に集中する事ができました。顎整形術、口唇口蓋裂口唇形成術、顎裂部骨移植、トラウマ、口腔外科外来、入院病棟、講義受講等、朝は6時からの回診、週末は同級生達との交流等、目紛しい毎日でしたが、5年生での臨床実習の総まとめとして、自分自身への新たなチャレンジとして、とても有意義な2週間となりました。

この実習を通し強く感じた事は、今の日本の医療システムでは、カナダの学生と比べ日本の学生が実際に患者さんに触れる事は、確かに難

しい環境にあります。しかし私たち岩手医科大学の学生に与えられた講義、実習室、学生に対して情熱的な先生方といった環境は、何も劣っていないということです。岩手医科大学で学んだ知識は世界の歯科界で十分に通用するのです。歯科医師国家試験合格率の低下、卒業後の進路など、現在歯科医師を志している者の多くは不安を抱え学生生活を過ごしていると思います。私はこの経験を通して、歯科医師という職業そして母校への誇りを新たにすることができました。

演題5. 当科で行われてきた頭頸部領域への超音波検査について

○東海林 理, 泉澤 充, 佐藤 仁,
高橋 徳明, 星野 正行, 齋藤 圭輔,
小豆嶋正典

岩手医科大学附属病院歯科医療センター
歯科放射線科

目的：当科で1984年に超音波検査が開始され2010年6月で検査件数が1万件に達した。そこで、これまで使用した超音波装置の変遷について調べ、過去10年間に行われた検査について統計学的に分析した。

1. 装置の変遷

・最初にRT-2000, 次にRT-2600が導入された。これらはグレースケール画像の表示しかできなかった。

・1996年にLOGIQ 500が導入された。この装置より血流をカラー表示する「ドプラモード」が搭載され、画像のデジタルデータとしての保存が可能となった。

・2009年にLOGIG P5が導入された。機器のコンパクト化と液晶ディスプレイによる画像の鮮明化がはかられ、データのハードディスクへの保存とUSBによる出力が可能になったことが特徴である。

2. 統計学的分析

対象・検討項目：2000～2009年の間に当科で超音波検査を行った4422件を対象として、件数の年次推移、年齢分布、外来と入院の件数の比較、良性疾患と悪性疾患の件数の比較、および

ドプラモード併用の有無について調べた。
結果：年間の検査件数は368～524件の間で推移し平均442.2件だった。年齢分布では、70代が1284件と最も多く、60代、50代と続いた。外来の検査は3425件と入院の997件の4倍だった。悪性疾患の検査は3617件と良性疾患の805件の4倍で、診断名として悪性は舌癌、良性はリンパ節炎が最も多かった。悪性疾患の検査はリンパ節転移の精査がほとんどであった。ドプラモードを使用したのは1181件で全体の1/4だった。

考察：・50～70歳代の患者数が多く、外来患者数が多くを占めた。癌の好発年齢であり、術後の予後検査が多いためと考える。

・悪性疾患の検査ではリンパ節の精査がほとんどで、良性疾患ではリンパ節炎の検査件数が最も多かった。この結果は超音波検査がリンパ節の評価に重要であることを示唆している。

分後および約45分後)に動脈採血を行い、ガス(pH, B.E., PCO₂, PO₂)分析を行った。

結果：全例、呼吸性アシドーシス(7例においては代謝性アシドーシスも併発)を発症していた。2回のガス分析についてはいずれの項目も優位な差はみられなかった。

考察：プロポフォールによって呼吸が抑制されているので呼吸性アシドーシスになっている。術後は覚醒の遅れや悪心・嘔吐などの合併症がみられないので改善されていると考えられる。

結論：LMAと自発呼吸を用いた全身麻酔では、酸素取り込みの経時的な悪化はみられなかった。

演題6. 自発呼吸下全身麻酔中の血液ガス分析値の変化

○久慈 昭慶, 菊池 和子, 熊谷 美保,
小坂橋 航, 佐藤 健一*

岩手医科大学歯学部総合歯科学講座
障害者歯科学分野,
同口腔外科学講座歯科麻酔学分野*

目的：岩手医科大学附属病院・障がい者歯科でのラリンジアルマスクエアウェイ(LMA)を用いた日帰り全身麻酔では、現在まで、退院後のトラブルは特に無かった。臨床的に有用な自発呼吸下LMA全身麻酔にも、人工換気下の気管挿管麻酔に対する利点・欠点はいくつか考えられるが、欠点の1つとして“時間経過に伴う機能的残気量および気道径からくる酸素化効率の低下”が考えられる。そこで今回われわれは、実際に“酸素化の効率が落ちているのか、また落ちているのであればどの程度なのか”ということを確認するため、患者の血液ガス分析値をレトロスペクティブに分析した。

対象・方法：平成22年5～6月に本学、障がい者歯科外来においてプロポフォールと亜酸化窒素を用いたLMA全身麻酔を受けたASA IおよびIIの患者12名。術中(LMA挿入後約15